

## 第17回日本ボランティア学習学会第4分科会



第4分科会は、阪内宏一理事が進行役を務めました。提題者として多田元樹さん(淑徳大学・淑徳小学校担当)、高橋功昌さん(宇都宮大学附属中学校)、栗田充治さん(亜細亜大学・「道德教育の理論と実践」担当)の3名、およびコメンテーターとして永井順國さん(政策研究大学院大学)、弘中郁美さん(島根県津和野町立青原中学校)の2名が中心となり、約15名の参加者を交えて、道德教育とボランティア学習のつながりをどう考えるか、活発な意見交換が行われました。

まず、多田さん・高橋さんからは、学校現場では道德教育もボランティア学習も、教科や総合的学習の時間や特別活動を含め必ずしも十分な状況にはないこと、そうした中でそれぞれがモデル的に取組んだ授業実践についての報告があり、他の教師は子どもの何を育てるかといった指導内容よりも、むしろ授業活動のやりかたに関心があったことが話されました。

また、栗田さんからは、授業の中で学生に対して行ったボランティア活動のイメージ調査では、最初は活動を「偽善や自己満足」と捉える学生の割合が高いことが報告され、こうした学生の心理状態を把握しておく必要があること、またボランティア活動を、「世のため人のため」というより、「自己の成長」といった自己本位的なものとして捉える傾向があることが指摘されました。さらにボランティア活動を「善行」と考える人がいるが、ボランティアは即そうした営みであるとは言えないとの指摘がなされました。

これらの意見発表に対して、弘中さんからは、子どもにとって心を耕してくれる教師の存在が大切であり、道德教育にもボランティア学習にも言えることだが、どういうことを身につけさせるかそうした「思い」のある教師が必要であるとの指摘がなされました。

また、永井さんからは一道德教育は究極的には主権者教育である。ボランティア学習は市民教育であり、重なると思う。今回の道德教育にかかる中教審答申にシティズンシップ教育が入ったが、その内容は言及されていない。消費者・環境・法・人権など様々な教育課題もシティズンシップ教育に収斂させることができるから、市民教育を中心的・総合的に実施するため、関係する教科・道德・特別活動・総合の時間を再構築していくという提案がなされました。

さらに、参加者も交えて、思いやりなど道德教育とボランティア活動に共通する資質について意見交換するとともに、ボランティア体験を通しての様々な学び(共感・主体性・人間としての在り方の自覚など)が道德教育とつながること、ボランティアと社会性、課題の発見と解決というボランティアのとらえ方などについて話し合わせ、熱のこもった分科会となりました。

(阪内宏一)